

優秀賞

「創造する・挑戦する」

―ちい婆さん―

柏日体高等学校2年

成 沢 希 望

ベッドの背にもたれ、窓の外を見ている婆さんは母の遠縁にあたる。なぜこの婆さんの見舞いに来なければならぬのか。名前は「何々」とか聞かされたが、覚える気など毛頭ないので、私は「ちい婆さん」と呼んだ。

【初回】

「希望、ご挨拶しなさい」

「希望です」

窓の外を見ている体の小さな婆さんは、こちらを見向きもしない。返事など期待する方が馬鹿だといった態度に、すっかり気分を害した私だった。

聞けば沖繩から内地に嫁いで子供にも恵まれず一人ぼっちで、親戚の人が代わる代わるお世話をしている。認知症の症状は日毎異なり、今日は最悪の日に来てしまったようだ。

母が口元のよだれをガーゼのハンカチで拭いてやると、されるがままになっている。介護士の方が来られると、初めて

顔を向けた。よく見れば、なかなか品のある婆様だ。

母にガーゼのハンカチを渡され、口元を拭いてやれとのジエスチャーを見て、面倒だと思いながら口元に押し当てた。すると、「ギャー」と叫んで私の手を払い除ける。

母を振り返るとニヤニヤ笑っていたので、私はハンカチを放り投げた。

「あら、おばさんは知らない人にされるのが嫌なのね」

母の言葉があまりに無責任で、怒るより早く私は病室を出た。

【五回目】

なぜだか分からないが、五回もちい婆さんの見舞いに来てしまった。拒絶され続け、もう金輪際行かないつもりが、母は兄弟の中で私だけを指名する。

「末っ子だから行くのは当たり前。それに暇なのはお前だけだ」

兄たちは口を揃える。父までも命令調で言うものだから、仕方なしでも五回来れば十分だろう。それにしても、婆さんはオレのことが嫌いなんじゃないかと思うほど、からだ全体でいやいやをする。

「希望、手を一つ叩いてみて」

訳が分からないが、これで早く帰れるならお安い御用だ。

「パン」軽く叩いてみる。すると、ちい婆さんがすぐに「パ

ン、パン」と二つ手を叩いた。これにはさすがに驚いて、もう一度「パン」と叩くと、やはり「パン、パン」と叩き返す。何度やっても同じなので、少しリズムカルに叩いても相変わらず反応がある。

「えっ、婆さんワルツになってるよ」

「そうよ、連れてきた訳が分かったかしら」

【八回目】

ちい婆さんに会いに来てから、三ヶ月が過ぎた。先月の一件以来、私は来るたびに手を叩いてみせた。そう長い時間ではないが、叩けば必ず二つ返ってくることは同じだった。

「母さん、そろそろ種明かししてもいいんじゃないか」

母は帰りの電車内で、ようやく話を始めた。ちい婆さんは昔音楽の先生で、母にピアノを教えてくれた方だそう。私が二歳からバイオリンをやっているの、どうしてもバイオリンを婆さんに聞かせてあげたいのだという。

「それなら、早く言ってくれよ」

母は唯一学校でも弦楽器をやっている私に、白羽の矢を立てたのである。

【九回目】

許可をとって、食堂の片隅でバイオリンを弾き出した。選んだ曲は『ジュピター』。車椅子のちい婆さんの顔が穏やかになったことに、今まで感じたことのない幸福感が湧く。

続いて苦手な『テネシーワルツ』を弾くと、母が途中で私の演奏を遮る。

「おばさんが何か言った。何、もう一度言ってみて」

「きぼ」

母は急に泣き出した。何度も何度も繰り返して我が子の名前を婆さんに教えてきた母である。私も確かにちい婆さんの声を聞いた。

年の暮れが迫る木枯らしの朝、親戚の人からちい婆さんが亡くなられたと知らせが届いた。家族全員で斎場に行き、わずか十名足らずでちい婆さんを送った。

私は随分と若いちい婆さんの、笑顔の写真に向かって手を叩く。空から「パン、パン」と音が返ってくるようで、何度も手を叩いた。

「ちいお婆さん、ほら好きなワルツですよ。音楽の話はできませんでしたが、手を叩きあって話をたくさんしましたね。

私は教えていただきました、音楽によって人を癒やす難しさ。そして、音楽による奇跡を。大丈夫です。ワルツは苦手ですが、これからも新しい曲に挑戦していきますから」

灰色の空に「ちい婆さん」は、最後まで見せなかった笑顔で吸い込まれていった。